



| | |
|-------------------------|---|
| タイトル Title | 冷静な対応を |
| 著者 Author(s) | 木村, 幹 |
| 掲載誌・巻号・ページ Citation | 岐阜新聞など; |
| 刊行日 Issue date | 2011-12-23 |
| 資源タイプ Resource Type | Article / 一般雑誌記事 |
| 版区分 Resource Version | author |
| 権利 Rights | |
| DOI | |
| JaLCDOI | |
| URL | http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001847 |

Create Date: 2018-08-16

12月19日、北朝鮮の国営テレビは、金正日総書記が二日前の朝死亡した、と報道した。前日には京都にて日韓首脳会談が行われ、従軍慰安婦問題について熱い議論が戦わされていた。北朝鮮の公式発表を信じるなら、その時には既に金正日は死去していた。両国は北朝鮮での重大事態の兆候さえ掴む事が出来なかった訳である。

勿論、ここで日韓両国の情報収集能力の欠如を批判するのは、容易である。しかし見落とされてはならないのは、状況は他国も50歩100歩だったことである。これ程までにグローバル化した世界においてさえ、我々は北朝鮮で起こっている事について、殆ど何も知りたくない。北朝鮮を巡る問題を考える上での出発点は、この点にこそある。

北朝鮮で今後何が起こり、周辺国にどのような影響を与えるのか。状況を詳しく知る事ができない以上、行すべきは、過去から類推する事だ。先例として参照すべきは、金日成死去時の状況である。当時は後継者である金正日が「3年間の喪に服する」ことが発表され、この間、北朝鮮に関わる重大な外交的事象は発生しなかった。北朝鮮のような国においては、最高指導者が機能停止すれば、重大決定が不可能になり、結果、硬軟両面において政治的進路の変更が困難になる。

北朝鮮にとって厄介なのは、金日成の生誕100周年に当たる来年は、「強盛大国の大門を開く」べき年に当たっている。ここでの一つのオプションは、金正恩が喪に服する間、政治的な代理人を立てて、これに政治を行わせる事である。父の死を理由に、祖父の記念日をキャンセルするのか、その逆なのか、或いは代理人を立て、彼に政治的権力を握らせるのか。金正恩は大きな選択を迫られている。仮に代理人を立てれば、暫くの間は、彼が最高権力者と言う事になる。

これ以外にも指摘しておくべき事はある。金正日が金日成に対してそうであったように、金正恩がその正統性を父から受け継いでいる以上、彼には父や祖父の下した政治的決定を覆す事は難しい。だとすると、金正恩指導下の北朝鮮は少なくとも暫くの間は、金正日の路線を受け継いで行くことになるだろう。不安定要因ばかりが指摘される北朝鮮だが、党や軍をはじめとする支配エリートの中に今の所、大きな対立の兆候は見られない。万が一、北朝鮮の体制が危機に晒された時、最初に地位を失うかもしれないのは彼等である。そう考えれば、周辺国からの圧力に晒された彼等が冒険的な行動を起こすと考えるのは合理的ではない。

だとすると、我行うべき事は、情報不足の中、不必要に大騒ぎする事ではなく、これから暫くの北朝鮮の動向を注意深く見守ることであろう。世界では並行して欧州発金融危機が続いており、11月には、韓国ウォンが大きく下げる事態さえ存在した。不安要因ばかりに注目する事は、市場にも誤ったメッセージを送る事になる。また、外交的にも不安定な状態に陥っている相手に対して、呼びかけを行っても成果を期待する事は難しい。ひとまずは北朝鮮の安定を待って、それから仕切り直しても遅くない。